

青梅市文化財ニュース

第 1 7 0 号

平成13年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

東京都レッドデータブックの蝶

「レッドデータブック」とは、絶滅のおそれのある野生生物のリストです。日本版の「日本の絶滅のおそれのある野生生物」は、1991年までに環境庁によりまとめられています。東京都では、さらにその東京都版とも言うべき「東京都の保護上重要な野生生物種」（1998年版）が作成されています。

東京都も地域によって環境が大きく異なるため、種の評価は本土部、伊豆諸島、小笠原諸島と地域ごとに区分されていて、全体では植物1002種、動物1221種の合計2223種が掲載されています。このうち本土部は植物642種、動物662種の合計1304種となっています。伊豆諸島や小笠原諸島では固有の種や亜種が多いため掲載種が多くなっているのに対して、本土部では都市化の進行により絶滅のおそれのある種が増えているという違いがあります。

本土部の動物のうち昆虫類は460種ですが、今回の調査がトンボ、チョウ、バッタ、カメムシ、コウチュウの5つの目^{もく}に限られているため、今後、他の目についても調査、掲載が行われれば、種数が大幅に増えることは確実です。昆虫類のうちチョウ目は54種が掲載されています。このうちベニシジミは、普通種であるにもかかわらず何かの手違いで掲載されてしまったようですし、元来東京都に生息していたのかどうか疑問の種も含まれていますので、これを除くと52種ということになります。

それぞれの種について、本土部を区部、北多摩、南多摩、西多摩に4区分し、区分ごとに、Aランク（絶滅の危機に瀕している「絶滅危惧種」）、Bランク（絶滅の危機が増大している「危急種」）、Cランク（生息環境の変化によりAランクやBランクへの移行が危惧される「希少種」）、Dランク（野生で絶滅と判断される種）等の評価が行われています。

Dランクの絶滅種は13種とされていますが、調査の漏れや評価の誤りがあり、正しくは9種（または10種）になります。雑木林の疎林に生息するクロシジミを除くと、他はすべて河原・草地か山地草原性のチョウで、東京都では真っ先にこのような環境が失われてきていることを物語っています。ツマグロキチョウ、クロシジミ、オオウラギンヒョウモン、アサマイチモンジの4種は、青梅市にも過去には生息していたチョウです。

絶滅種を10種として残る42種のうち青梅市には29種が現在も生息し、他に現在も生息している可能性が高い種が4種いて、併せると33種になります。この中には、青梅市では普通に見られたり、局地的ではあっても良好な生息地が残っている種が数多く含まれています。しかし区部や北多摩で絶滅したり、絶滅が危惧されるために評価が高くなっている種に以下のものが該当しています。

ミヤマセセリ、ホソバセセリ、ヒメキマダラセセリ、オナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、ウラゴマダラシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、コツバメ、ゴイシシジミ、テングチョウ、メスグロヒョウモン、イチモンジチョウ、コムスジ、オオムラサキ、サトキマダラヒカゲ、コジャノメ。これらは、市街化が進むにつれて生息地が狭まり追いつめられています。

ちなみに、42種のうち何種が生息しているかを、現在も残っている可能性のある種を含めて区市町村別に比較すると、奥多摩町と檜原村36種、八王子市35種、青梅市は33種で4番目にランクされ、昭島市まで行くとこの数字は10種に減ってしまいます。これは、青梅市にはまだまだ自然が残っていることの表われです。この自然を後世まで大切に残したいものです。

(文責 久保田 繁男)